

## サファヴィー朝期シャイフ・サフィー廟の管財人とワクフ財

近藤 信彰

### Waqf Administrators and Properties of the Ardabil Shrine during the Safavid Period

KONDO, Nobuaki

This study examines the waqf administrators of the Ardabil Shrine of Shaykh Ṣafī al-Dīn Ishāq (d. 1334), the founder of the Safavid Sufi order and ancestor of the Safavids, during the Safavid period. Although the real estate inventories of the shrine (*ṣarīḥ al-milk*) contain detailed information, it remains unclear who controlled the properties and how they were managed. This study lists the 53 waqf administrators of the shrine and discusses the system for the control of property.

Unlike other shrines of equal importance, such as Mashhad, Qum, and Rey, the Ardabil Shrine was controlled by various groups of people. The first group was the Safavid or Shaykhāvand clan, who were relatives of the Safavid shahs. The Shaykhāvand, some of whom were Sufis and enjoyed tax immunity, lived in Ardabil. When Shāh ‘Abbās visited Ardabil, he always met with notable Shaykhāvand and paid respect to them. The second group was the Ṭālīsh and the Qarāmanlū, both old allies of the Safavid order who had helped Shāh Ismā‘īl during his exile. The third group was the Qizilbāsh, Turkic tribesmen who supported Safavid military campaigns. These three groups were rarely found among the administrators of other shrines, indicating that the Ardabil Shrine had a particular significance for Sufis and Safavid followers.

Another point concerns the shrine’s old and new waqf departments. Although previous studies alluded vaguely to them, this study pinpoints the timing of Shāh ‘Abbās’s establishment of the new waqf department. Specifically, this occurred when he established the Chahārdah Ma‘šūm Waqf related to Ḥusaynī sayyids. ‘Abbās appointed a Qizilbāsh amir as the administrator of the new department. The central government controlled the new waqf, and relevant documents were probably preserved in Isfahan. Consequently, no document concerning the new waqf department remained in the shrine, while *ṣarīḥ al-milks* and other documents on the old waqf department had been preserved there.

**Keywords:** Shaykh Safi Shrine, Ardabil, mutavalli, waqf, Safavid

キーワード: シャイフ・サフィー廟, アルダビール, 管財人, ワクフ, サファヴィー朝



はじめに

1. サファヴィー朝の聖廟・ワクフ管理
2. サフィー廟の管財人
  - 2.1 制度としての管財人

## はじめに

アルダビールのサフィー廟の財産管理を研究する際に、廟の不動産目録 (*ṣariḥ al-milk*) が最も重要な史料の一つであることは疑いない。しかし、貴重な情報を含むとはいえ、不動産の目録のみでは、管理されていた財産の内容や取得の経緯については知ることができても、それらがいかに管理されていたか、情報を引き出すのは難しい。本稿では、財産管理の主体であったサフィー廟の管財人について、さまざまな史料を用いながら情報を集め、問題を整理したい。特に、どのような人物が管財人に就任し、どのような職務を行っていたかは、廟の財産管理の根幹にかかわると言えよう。筆者は、以前、テヘラン南郊レイのシャー・アブドゥルアズィーム廟について、サファヴィー朝期の聖廟とワクフについて論じたが [Kondo 2015]、本稿の作業を通じて、サファヴィー朝とサフィー廟の関係の一端が明らかとなると考える。

サフィー廟の管財人については、すでにアフマディーらによる論文があるが [Aḥmadi & Luṭfi 2009]、その後刊行された史料も多く、大きく書き換えることが可能である<sup>1)</sup>。リズヴィーによるサフィー廟研究も主眼が建築にあるため、管財人やワクフ財についての記述は少ない [Rizvi 2000, 2011]。ルトフィーの研究はサファヴィー朝期のサフィー廟全般を扱うが、管財人にかかわる部分はそれほど多くない [Luṭfi 2016-7: 134-48]。メルヴィルの最新の研究は、シャー・アッバース (在位 1587-1629) のサフィー廟へ

- 2.2 管財人就任者
3. ワクフ財の旧部門と新部門
4. 管財人の職務  
おわりに

の援助を扱っているが、ワクフ全体に関する視点を欠いている [Melville 2020]。

## 1. サファヴィー朝の聖廟・ワクフ管理

本論に入る前に、サファヴィー朝下で聖廟やワクフがいかに管理されていたかを確認しておこう。アフガーン政権君主アシュラフ (在位 1725-29) のもとで作成されたサファヴィー朝行政に関する史料『王侯の慣わし』 [Dastūr] は、国家の官職として5つの聖廟の管財人をあげている。1. マシュハドのレザー廟, 2. コムのマアスーム廟, 3. レイのアブドゥルアズィーム廟, 4. コムのサファヴィー朝君主の墓廟, そして, 5. アルダビールの聖廟である [Dastūr: 8-12]。他のワクフ管財人はこの史料では言及されず、ワクフ施設としてこれらの廟をサファヴィー朝が特に重視していたことを示している。シーア派を王朝としてイラン高原に導入したサファヴィー朝が、第8代イマームとその妹の廟を重視するのは当然であり、また、アブドゥルアズィーム廟はシーア派の聖地として長い歴史を持っていた。これに対して、コムの君主の廟とアルダビールのサファヴィー家の祖廟は、王朝とのかかわりで重視されたと考えられる。

さて、他の聖廟と異なって、アルダビールについては、聖廟も管財人も複数形で示されていることに注意したい。その説明は以下の通りである。

アルダビールの聖廟の管財人  
(Mutavalliyān-i Āstānajat-i Ardabil)

1) 主なものとして、*Ḥayātī, Aḥzāl, Fihrist* など。

彼の職務は、コムของサファヴィー朝の墓廟の管財人について上述した通りである。2名であり、一人は旧部門 (qadimī), もう一人は新部門 (jadidī) [の担当] である。この廟に関するすべての管理・監督は新部門の管財人が行い、旧部門のワクフ財にも関与した。

彼らの収入の実際については記録がない。記憶のかぎりでは、彼らの通常の手当 (rusūm) は [年] 700 トマーンを超えなかった [Dastūr: 12]。

ここで旧部門と新部門の2名の管財人が任命されていることがわかる。他の4つの聖廟については、それぞれ1名のみ管財人がおかれており、サフィー廟だけが例外である。

しかし、これまでの研究によって、少なくとも、マアスーム廟とアブドゥルアズィーム廟のワクフについては、新旧二つの部門があって、それぞれに管財人がおかれていたことが知られている [Mudarrisi Ṭabāṭabāyī 1976: I 242–49; Kondo 2015: 47–51]。ところが、この史料はサフィー廟以外については、一人の管財人しか言及していない。それはなぜだろうか。

このことは、サファヴィー朝の全般的なワクフの扱いと関連している。『王侯の慣わし』の宗務の頂点に立つサドル職の説明で、すべてのワクフ財の監督 (ratq va fatq-i kull-i mawqūfāt) は2名のサドルの職務であると述べつつ [Dastūr: 6] も、以下のような説明を加えているのである。

ワクフ財の職員の任免は、[そのワクフが]

恩寵によるもの (tafviṣī) であるならば、特定サドル (ṣadr-i khāṣṣa)<sup>2)</sup> と一般サドル (ṣadr-i ‘amma)<sup>3)</sup> に委ねられる。もし、[そのワクフが] 法的 (shar‘ī) なものであるならば、どのシャリーア法官もサドルも介入しない。その場合、法的にワクフ設定者が定めた者なら誰でも、管財人や権限を持つ者となり、管理を行う。これを変えすることは預言者の聖法に反することである [Dastūr: 8]。

すなわち、一般の個人がイスラーム法に則って設定したワクフはここでは「法的な」ものとして説明され、君主によって設定された、もしくは国家によって管理されたワクフと区分されており、後者については、全面的にサドルによって監督がなされる仕組みになっていたのである。それを踏まえれば、コムやレイの例は、二人の管財人がいても、一人はワクフ設定者の定めた規定に基づく「法的な」ワクフであり、この管財人の管理するワクフ財は国家の直接の管理を受けなかったために『王侯の慣わし』では言及されなかったのである。

ただし、「介入しない」とされてはいるものの、サドルは「法的な」ワクフについても、裁定を下すことがあった。たとえば、1080年ズー・アルヒッジャ月/1670年4–5月、一般サドル、アブー・サーリフが発した裁定 (mithāl)<sup>4)</sup> は、アブドゥルアズィーム廟の「法的な」ワクフであるはずの旧部門のワクフ財からの収入の分配に関するものであった [Hidāyatī 1965–6: 99–100]。また、1118年ラジャブ月/1706年10–11月に特定サド

- 
- 2) 特定サドルは、イスファハーン、ヤズド、マーザンダラーン等、ワジールが統治する直轄州のワクフ財を管轄していた。また、「恩寵を与えられた部門 (sarkār-i fayz-āthār)」のワクフの管理も特定サドルの職務であった [Dastūr: 7–8]。
  - 3) 一般サドルは、ṣadr-i mamālik (諸州のサドル) とも呼ばれ、直轄州以外の総督や知事が統治する州のワクフ財を管轄していた [Dastūr: 7–8]。なお、サドルのワクフ管理については Floor も言及しているが、誤りが多いため利用には注意を要する [Floor 2000: 474–76]。
  - 4) このタイプの文書についての最新の研究として、Bhaloo & Rezai 2019。ただし、付録にあるミサールのリストはかなり不完全である。

ル、ミールザー・ムハンマド・パーキルが発した裁定は、マーザンダラーン地方の3つの聖廟について、以前の管財人が死去し、「法的な」および「恩寵による」管財人が不在であるため、別の人物を任命するものである [Dānishpazhūh 1966: 593–95]。サドルの介入は、状況に応じて柔軟になされていたようにも見える。

一方、サドルのもとで財務を取り仕切るワクフ財財務官 (mustawfi-i mawqūfāt) の職掌については史料により、内容が微妙に異なる。タフマースブ2世時代に編纂された行政便覧は、「帝国において、王が行ったものであろうと、他のものが行ったものであろうとすべてのワクフ財に関する業務 (dād va sitad) の管理はすべて彼が行う。これらのワクフ財から年金や俸給を受領する者への勅令や命令書はすべて彼が作成する」と述べる [Alqāb: 67]。これに対して、『王侯の慣わし』は以下のように述べる。

彼の仕事は、帝国の直轄州<sup>5)</sup>・非直轄州のワクフ財の大臣達、財務官達、管財人達、担当官達 (mutaşaddiyān), 差配達 (mubāshirin) が自らの財務記録 (muḥāsaba) のすべてをワクフ財局 (daftar-i mawqūfāt) に送ったものを検証し、支出のための文書を整え、サドル達の命により、各聖廟 (mazārāt-i sarkārāt) の精算書 (mufāṣā-ḥisāb) と支出指示書 (ṭavāmīr-i nasaq) を作成し、それぞれのワクフ財の管財人と差配に引き渡して、その通りに運営 (dād va sitad) させる [Dastūr: 82]<sup>6)</sup>。

すべてのワクフ財というよりも聖廟を中心に管理していたかのように見える。実際

に、17世紀のものと考えられるマーザンダラーン地方の83の聖廟(具体的にはイマームの子孫のマザール66とダルヴィーシュのタキヤ17)の管財人とそのワクフ地の広さ、収入ついてまとめた巻物が紹介されている [Dānishpazhūh 1966]。サファヴィー朝期にメッカ巡礼以上に、聖廟への参詣が強調されたことを考えると [Arjomand 1984: 165–66, 168–70], サファヴィー朝のワクフ管理が聖廟のそれを中心に行われていたとしても不思議はない。

明らかなことは、サフィー廟の場合、王朝成立以前からサファヴィー家が管理していたため、通常であれば「法的な」ワクフとなるべきところ、王朝成立後は国家管理となったという特殊性があって、二人の管財人が行政便覧において並立することにつながったという点である。サファヴィー家の祖廟としての性格を示していると言える。

## 2. サフィー廟の管財人

### 2.1 制度としての管財人

表1はさまざまな史料をもとに、可能な限りサフィー廟の管財人をまとめたものである。就任時期がわからないもの、相互に矛盾をきたしているものもあるが、すべて含めて計53名となる。リズヴィーが言及しているのが11名 [Rizvi 2000: 141–46], アフマディーらが表にしているのが21名 [Aḥmadi & Luṭfi 2009: 34–35], ルトフィーのそれが28名 [Luṭfi 2016–7: 138–39] であるから、これまでいかに不十分な材料で論じてきたかが明らかとなる。たとえば、アフマディーらはシャー・イスマーイール時代 (1501–24) の管財人として、ハーン・アフマド・ベグ

5) 原文は khāṣṣa. 長谷部はこれを「ハーッセ地」と呼ぶが [長谷部 1990: 30–35], 行政上の区分と税務上の区分には齟齬があるため、本稿では行政区分としての「ハーッサ」を直轄州と呼ぶ。ロエルボルの国有州 (domänenprovinzen) にあたる [Röhrborn 1960: 122–31]。

6) なお、テキストが酷似している別の行政便覧 *Taḥkirat al-Mulūk* では、「聖廟」の語が落ちている [Taḥkirat: 44]。

(4) とスライマーン・ミールザー<sup>7)</sup>のみを挙げ、ルトフィーはそれにハージャ・ラフィウ・アッディーン (9) だけを加えているが、表 1 には 9 名の管財人を挙げた<sup>8)</sup>。少なくとも、この間、一人の人物が安定的に管財人を務めていたわけではなく、数年で交代するのが通例だったのである。

管財人の表をつくるにあたり、難しいのは管財人の職位が複雑であることである。法的には王朝成立後はサファヴィー朝君主が法的には管財人であるはずである。しかし、シャー・イスマエールは自らの代理 (niyābat) にシャイフ・ナジム・アッディーン (2) を任命し、さらにナジム・アッディーンはその代理人 (vikālat) として、ミールザー・アフマド (3) を任命したのである [Ḥayātī: 89]。もっとも、ナジム・アッディーンは中央でも君主の代理にあたるヴァキール職に就任しており [Ḥabīb 490, Savory 1960: 94–95], アルダビールの聖廟の諸事を実際に扱うことができたとは考えにくい。また、ハージャ・ハーン・アフマド (13) は、『ハヤーティー史』では 935/1528–9 年から 1 年間管財人を務めたことになっているが [Ḥayātī: 89], 935 年ラジャブ月/1529 年 3–4 月の文書では、管財人の代理 (vakīl) であったとされている [Fihrist: 74]。これに対して、アブダール・ベグ・ザーヒディー (35) は、1009/1600 年の任命状で、独立の管財人に任命すると書かれている [Silsilat: 222]。しかし、1605–6 年 (巳年) の年代記の記述では、当時管財人であったズー・アルフィカール・ハーン (34) の代理 (nā'ib) であったとある [Afzal III: 393]。しかし、後述す

るタフマースブ 2 世の二つの勅令 (いずれも 1137 年ジュマード・アルアール・ヒラ月/1725 年 2–3 月付) において、ムルタザークリー・ベグ (52) が管財人の代理 (niyābat) であると述べられているが、この場合の管財人は君主のタフマースブ 2 世という論理である [Fragner 1975b: 196, 200–01]。

サフィー廟の管財人が地方の知事・総督を兼ねている例も見られる。カラーマーンルー部の兄弟、ファルハード・ハーン (33) とズー・アルフィカール・ハーン (34) はアゼルバイジャン州総督との兼任について記述がある [Ālam-ārā: 454, Afzal III: 113]。ただし、当時最も有力な将軍たちで、各地を転戦していたことから [Reid 1984: 203–04], 上述のように、実務はさらに代理を任命していたと考えられる。アルダビール知事との兼任が確認できるのはサム・ミールザー (22), ムサイヤブ・ハーン (30), カルブアリー・ベグ (40), ナザルアリー・ベグ (41) である。また、アミール・アシュラフ (19) の成年 (1538 年) の管財人への任命状ではアルダビール地方の住民は彼をこの地方の「独立の管財人であり、知事であり、ダールーガであることを知れ」とあり [Ev-oghli: 233], やはり兼任であったことがわかる。一方、アブダール・ベグ (35) の場合は、管財人に加えて、1607–8 年、アルダビールが直轄州となった際にこれを管理するダールーガに任命されている [Afzal III: 456–57]<sup>9)</sup>。ただし、こうした兼任は、ロエルボルンが述べるほど [Röhrborn 1966: 72] 頻繁ではなかったことも、表 1 からは明らかである。

明白なことは、制度的にもサフィー廟の管

7) スライマーン・ミールザーはシャー・イスマエールの弟であるが、彼がサフィー廟の管財人であったという史料はない。アフマディーヤルトフィーが引く史料は、スライマーンがアルダビールにいたこと、反乱を起こした際に廟の財宝庫を開けて、金銀の製品を奪ったと述べるもので、管財権の所在についての言及はない [Ālam-ārā-yi Šafavī: 427]。

8) 新たな情報は主に『ハヤーティー史』によるが、すでに校訂者ゲレグラーにまとめられている。彼はタフマースブ時代まで計 16 名の名前をあげている [Ghereghlu 2018: xvii]。

9) この直轄州化については、長谷部も Röhrborn も触れていない [Röhrborn 1966: 118–22; 長谷部 1990: 32–34]。

表 1 サファヴィー朝期サフィー廟の管財人

	年代	管財人	任命者	詳細	典拠
1	1494	Shāh Ismā'il*		Sulṭān 'Alī の後任	<i>Hayātī</i> 89
2	1500-1 以降	Shaykh Najm al-Dīn Gilāni	Shāh Ismā'il	niyābat. 1509-10 年没	<i>Hayātī</i> 89
3		Mirzā Aḥmad Daylamī	Shaykh Najm al-Dīn Gilāni	vikālat. 人物詳細不明。	<i>Hayātī</i> 89
4	1503	Khān Aḥmad Beg Ṣafavī*		詳細不明	<i>Silsilat</i> 133; ' <i>Abdī</i> II 158
5		Khalaf Beg (Ṭālish)	Shāh Ismā'il	Khalifat al-khulafā 1514 年没	<i>Hayātī</i> 89
6		Khvāja Ḥasan Beg Ṣafavī*	Shāh Ismā'il	Khvāja Jān Mirzā b. Shaykh Ibrāhīm の子	<i>Hayātī</i> 89; <i>Silsilat</i> 133
7		Zayn al-'Ābidīn Ṣafavī*	Shāh Ismā'il	1512 年没	<i>Hayātī</i> 89; <i>Khulāṣat</i> 123
8		Mirzā Muḥammad Ṭālish	Shāh Ismā'il	Ardabil 付近の勢力	<i>Hayātī</i> 89; <i>Ḥabīb</i> 448
9		Khvāja Rafī' al-Dīn Muḥammad	Shāh Ismā'il	1506-11 年の文書に登場	<i>Fihrist</i> 72-73
10	1524	Khvāja Ḥasan Beg Ṣafavī*	Shāh Ṭahmāsb	再任	<i>Hayātī</i> 89
11		Ācha Sulṭān Qājār	Shāh Ṭahmāsb	2 年間	<i>Hayātī</i> 89
12		Nazar Aqā Khāzin	Shāh Ṭahmāsb	宦官?	<i>Hayātī</i> 89; <i>Khuld I</i> 577
13	1528-9	Khvāja Khān Aḥmad Beg Ṣafavī*	Shāh Ṭahmāsb	Ma'ṣūm Khān の父 1 年間 Wakil-i Mutavalli	<i>Hayātī</i> 89; <i>Silsilat</i> 140; <i>Fihrist</i> 74
14	1529-30	Ibrāhīm Beg Qaṣṣāb-ugli	Shāh Ṭahmāsb	詳細不明	<i>Hayātī</i> 89
15	1530-1	Khvāja Khān Aḥmad Beg Ṣafavī*	Shāh Ṭahmāsb	再任 2 年間	<i>Hayātī</i> 89
16	1532-3	Ḥamza Sulṭān Amāsiyalū	Shāh Ṭahmāsb	1 年 詳細不明	<i>Hayātī</i> 89-90
17	1533-4	Ḥaydar Qulī Beg	Shāh Ṭahmāsb	3 年 詳細不明	<i>Hayātī</i> 90
18	1540 以前?	Mir Ibrāhīm Iṣfahāni	Shāh Ṭahmāsb	詳細不明	<i>Ṭahmāsb</i> 43; <i>Silsilat</i> 97
19	1536	Amir Ashraf Awḥadi	Shāh Ṭahmāsb	アゼルバイジャンの有力者 8 年。 他の管財人たちの見本 1544-5 年没 戊年 (1538) の任命状	<i>Hayātī</i> 90; ' <i>Abdī</i> I 13a; <i>Afzal</i> II 262-63; <i>Ev-oghli</i> 232-33
20	1543	'Alī Beg Takkalū	Shāh Ṭahmāsb	<i>Hayātī</i> では、1545-6 年就任。	' <i>Abdī</i> I 52b; <i>Fihrist</i> 76-77; <i>Hayātī</i> 90
21	1543	Ma'ṣūm Beg Ṣafavī*	Shāh Ṭahmāsb	Shaykhāvand	<i>Hayātī</i> 90; <i>Afzal</i> II; Martin
22	1549	Sām Mirzā*	Shāh Ṭahmāsb	王弟。Ardabil 知事兼任 12 年間	<i>Khulāṣat</i> 550
23	1563-4	Sulṭān Ibrāhīm Mirzā*	Shāh Ṭahmāsb	任命されるも赴任せず。	<i>Khulāṣat</i> 440
24	1565?	Sayyid Khān Aḥmad Beg* Ṣafavī	Shāh Ṭahmāsb	Khvāja Ḥasan Beg の子?	Fragner I 186; <i>Fihrist</i> 79, 154, 172
25	1567-8	Zahīr al-Dīn Ibrāhīm Ṣafavī*	Shāh Ṭahmāsb	'Abdī 版の編纂 1569 年の取引	' <i>Abdī</i> I 8a, 60a
26	1576 以前	Abū al-Valī Injū'ī Shirāzī	Shāh Ṭahmāsb	サイド	<i>Khulāṣat</i> 664 ' <i>Ālam-ārā</i> 148
27		Shaykh Shāh Beg*		Khvāja Ḥasan Beg の子; Khān Aḥmad Beg の弟	<i>Silsilat</i> 133
28	1576	Ibrāhīm Khān Ṣafavī*		取引記録 詳細不明	<i>Fihrist</i> 155
29	1577	Abū al-Valī Injū'ī Shirāzī	Muḥammad Khudābanda	再任。1580 年、軍の Shaykh al-Islām に就任	<i>Khulāṣat</i> 664; ' <i>Ālamārā</i> 148
30	1586	Musayyab Khān Takkalū	Muḥammad Khudābanda	Ardabil 知事兼任。	<i>Khulāṣat</i> 828
31	1591	Mirzā Isma'il b. Mir 'Abd al-Valī	Shāh 'Abbās	サイド	<i>Afzal</i> III 94, 107 <i>Silsilat</i> 110

表1 続き

年代	管財人	任命者	詳細	典拠
32	Amir Ṣadr al-Dīn Muḥammad		1591-2年の取引記録あり	<i>Abdī III</i> 104, 106, 187
33 1592-3	Farhād Khān Qarāmānlū	Shāh 'Abbās	Āzarbāyjān 総督兼任 1598年死去	<i>'Ālamārā</i> 454
34 1592-3	Zū al-Fiqār Khān Qarāmānlū	Shāh 'Abbās	Āzarbāyjān 総督兼任 1603年 Ardabil 知事兼任 前任者の弟	<i>'Ālamārā</i> 638; <i>Afzal III</i> 113; Ṣafarī 2: 228-9
35 1600	Abdāl Beg Ṭālish Zāhidi	Shāh 'Abbās/ Zū al-Fiqār Khān	1600年の任命状 知事の Na'ib Mutavalli-i qadimi	<i>Afzal III</i> 393, 456, 664; <i>Silsilat</i> 218-33; <i>Fihrist</i> 81
36 1605-6	'Abbās 'Alī Sulṭān Shāmlū	Shāh 'Abbās	Mutavalli-i jadidi	<i>Afzal III</i> 393
37 1616	Shaykh Sharif Beg Ṭālish Zāhidi	Shāh 'Abbās	Mutavalli-i qadim Ṣipāhāni 版の編纂 1632年失脚	<i>Afzal III</i> 700 <i>Jahānārā</i> 246-47
38 1624	Qurbān 'Alī Beg Shāmlū	Shāh 'Abbās	Mutavalli-i jadidi	<i>Afzal III</i> 923
39 1633	Sayyid Aḥmad Husaynī	Shāh Ṣafī	詳細不明	<i>Fihrist</i> 84
40 1636-7	Kalb 'Alī Beg Qājār	Shāh Ṣafī	Ardabil 知事兼任	<i>Khuld II</i> 241; <i>Fihrist</i> 112
41 1638-9	Nazar 'Alī Beg Zū al-Qadr	Shāh Ṣafī	Ardabil 知事兼任	<i>Shāh Ṣafī</i> 163; <i>Jahānārā</i> 288; <i>Khuld II</i> 283
42 1642	Ilāhī Beg		詳細不明	<i>'Abdī II</i> 199
43 1656-7	Murtaẓā Qulī Khān Bijarlū Shāmlū	Shāh 'Abbās II	元 qorchī-bāshi 1668年でも在職	<i>Khuld II</i> 577; <i>Jahānārā</i> 612; <i>Fihrist</i> 86
44 1663-4	Bāyazīd Beg	Shāh 'Abbās II	詳細不明	<i>Naṣrābādī</i> 699
45	Mawlānā Muḥammad 'Abid	Shāh 'Abbās II	Ardabil の Shaykh al-Islāmi 家	Afshār 185
46 1674	Muḥammad Mu' min Beg	Shāh Sulaymān	詳細不明	<i>Fihrist</i> 172; Fragner I 190
47	Mīr Ibrāhīm*		Shaykh 'Abd al-Raḥmān の子孫	<i>Silsilat</i> 97
48	Ḥājji Sayyed Ma' ṣūm Begā*		Shaykh Bāyazīd b. Shaykh Ibrāhīm の子孫 Sarkār-i jadidi	<i>Silsilat</i> 132 <i>'Abdī II</i> 105
49 1706-7	Ibn Murtaẓā Qulī Khān Shāmlū	Shāh Sulṭān Ḥusayn		<i>Ṣafvat</i> 202
50 1714	Muḥammad Ḥusayn Beg	Shāh Sulṭān Ḥusayn	Sarkār-i jadidi	Fragner I 192; <i>Fihrist</i> 166
51 1724	'Alī Qulī Beg Ṣafavi*	Shāh Ṭahmāsb II	Jadid-i sarkār	Fragner II 183; <i>Fihrist</i> 172
52 1725	Murtaẓā Qulī Beg Ṣafavi*	Shāh Ṭahmāsb II	Niyābat-i tawliyat-i qadim va jadid	Fragner II 196, 200-01; <i>Fihrist</i> 166
53 1732	Muḥammad Ṣafī Ṣafavi*		Mutavalli-i sarkār-i jadidi	Barati

Afshār=Afshār 1967, Barati=Barati 2020, Fragner I=Fragner 1975a, Fragner II=Fragner 1975b, Barati=Barati 2020, Martin=Martin 1965, Ṣafarī=Ṣafarī 1380Kh

\*: Ṣafavi 家出身者

財人職には、後述する新旧部門のことも含めて、かなりのゆらぎがあることである。アルダビールはカズヴィーン遷都以降、サファヴィー朝の中央とは距離的に離れてしまい、対オスマン戦争に巻き込まれ易い場所であった。このため、行政との関係は政治情勢にも

左右される傾向があったのである。

## 2.2 管財人就任者

53名の管財人就任者リストから一言で傾向を述べるのは難しい。ここでは、いくつかのグループに分けて検討する。

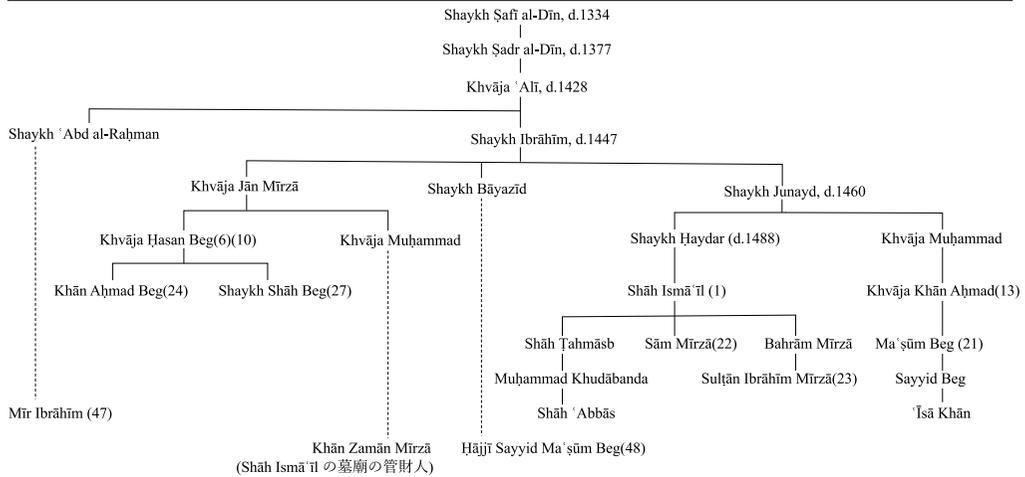


図1 サファヴィー家/シャイハーヴァンド家系図

*Silsilat* に基づく

() 内の数字は表1の管財人に対応

### 2.2.1 サファヴィー家/シャイハーヴァンド家

聖廟に埋葬されている聖者の子孫が代々管財人を務めるのは、しばしば見られる現象である。サフィー廟の場合、子孫は傍流のシャイハーヴァンド家を含むサファヴィー家となる。表1で\*印をつけたものがこれに属することを示すが、全部で19名であり、全体の約36パーセントで、意外に少ない。もっとも、由来名がわからないもののなかにも、サファヴィー家のものが含まれている可能性がある。

図1はこれらのうち、続柄がわかるものをまとめた系図であり、数字が表1に対応している。王家そのものよりもサファヴィー家/シャイハーヴァンド家から広く管財人が出ている。シャイハーヴァンド家では宰相も務めたマアスム・ベグ(21)が有名であるが[羽田1987: 40–42]、彼とは異なるジュナイド系ではない家系からも、管財人になるものが現れており、中央で彼らが失脚したのちも<sup>10)</sup> その状況は変わらない。

預言者の子孫サイドとされたシャイハーヴァンド家はアルダビールに居住していた

[*Ālam-ārū*: 100]。1635年の日付を持つ史料によれば、免税特権を持ち、税収からの手当(*suyūrghāl*)を持つシャイハーヴァンド家などのスーフィー600名が、アゼルバイジャンにいたという[Afzal III: 1004]<sup>11)</sup>。シャー・アッパースがアルダビールを訪れた際には、管財人などサフィー廟の関係者に対するのと同様に、シャイハーヴァンド家の者達に謁見の機会を与えた[Afzal III: 107, 125, 442, 572, 596, 922]。アッパースは以下のようにも述べたという「アルダビールはこの王朝の灯火の礎であり、ここでは大仰なことはしない。シャイハーヴァンド家は自分の親族であり、アルダビールの人たちは同郷者である」。このとき、終日、アルダビールで最も立派な庭園である、シャイハーヴァンド家のパーヤンドゥル・ハーンの庭園で過ごし、朝から夜まで酒宴を続けたという[Afzal III: 517]。このようなシャイハーヴァンド家の特別な地位が、彼らが聖廟の管財人を輩出する理由だったのである。

### 2.2.2 ターリシュ、カラーマーンルー

イラン系のターリシュはもともとアルダ

10) 具体的には、コルチバシであったイーサー・ハーンの1632年の処刑を指す。

11) Ghereghlouの翻刻本は財務数字については誤りも多いため、写本でも確認した。

ピール周辺に居住する集団であり [Astarian & Borjian 2005: 44], ある史料はシャイフ・サフィーやサドル・アッディーン, ハイダルと歴代のサファヴィー教団長に従っていたとする [Āmīnī: 259, 268, 274]。トルコ系のカラマーンルーは15世紀初めにはアラス川以北のバルダア, ガンジャ付近に定着していた [Woods 1999: 196]。シャー・イスマエールが即位前にギーラーン地方ラーヒージャーンで亡命生活を送ったとき, 彼に付き従っていたいわゆる「ラーヒージャーンのスーフィー達」のなかに, ターリシュが1名, カラマーンルーが2名含まれていた [羽田 1978: 41; Aubin 1984: 7-8]。表1のハラフ・ベグ (5) は, この中の大ハリファ (khalifat al-khulafā') として知られるターリシュ出身のハーディム・ベグのことを指す。ファルハド・ハーン (33) とズー・アルフィカール・ハーン (34) は, このカラマーンルー出身のスーフィー達の一人バイラム・ベグの孫にあたる。この二人は軍人としても栄達を遂げ, アゼルバイジャン総督やアルダビール知事を務めた。ターリシュ出身のミールザー・ムハンマド (8) はイスマエールがラーヒージャーンを出発した後, 彼を匿い, キジルバシュに先んじて彼に仕えた [Ḥayātī: 225-26; Aḥsan: 42-43]。同じくターリシュ出身のアブダール・ベグ (35) とその弟シャイフ・シャリーフ・ベグ (37)<sup>12)</sup> はシャイフ・サフィーの師, シャイフ・ザーヒド・ギーラーニーの子孫でもある [Silsilat: 222, 234]。

政治史的にはサファヴィー家に古くから仕えた譜代集団はキジルバシュの台頭により, 力を失った。しかし, サフィー廟の管財人にはスーフィーと繋がりのある古くからの縁者が名を連ねていることが興味深い。フェズ

リーは, アルダビール, ターリシュ, カラーチェダーグ, アルシャク, モガーンの税収による手当を持つ1500名のスーフィー達に言及しており [Afzal III: 1004], 彼らの存在が管財人の任命に影響を与えた可能性もある。

なお, 1632年, コルチバシであったシャリーフ・ベグの子チェラーグ・ハーン<sup>13)</sup>の処刑に伴い, シャリーフ・ベグも捕られて財産を没収された [Khuld II: 118-19; Jahānārā: 249]。その後, ターリシュやカラマーンルーの管財人を見いだすことはできない。

### 2.2.3 キジルバシュ

キジルバシュ出身の管財人も散見される。アーチャ・スルターン (11), アリー・ベグ (20), ムサイヤブ・ハーン (30), アッバースアリー・スルターン (36), クルバーンアリー・ベグ (38), カルブアリー・ベグ (40), ナザルアリー・ベグ (41), ムルタザークリー・ベグ (43) およびその息子 (49) である。彼らの任命の背景には, 治安上の問題のほか, 罪を逃れるためにサフィー廟に逃げ込む事例があるなど [Ālam-ārā: 199, 260; Khulāṣat: 708], キジルバシュにとってこの廟が信仰の対象であったことと関係があるのだろう。アッバース時代の新部門の管財人2名がキジルバシュであり, また, シャリーフ・ベグ以後, キジルバシュの管財人が3代続く。ムルタザークリー・ベグはその前にコルチバシ職を務めた有力者であった。少なくとも, マシュハドのレザー廟, コムのマアスーム廟, レイのアブドゥルアズィーム廟にはサファヴィー朝期にキジルバシュの管財人がいた形跡はないのと対照的である [Sawhāniyān-i Ḥāqīqī & Naqdī 2019-20: 51-52; Mudarrisī Ṭabāṭabāyī 1976: I 198-201, 242-47; Kon-do 2015: 57, 62]。

12) Rizvi はシャイフ・シャリーフ・ベグを単にアブダール・ベグの親族とする [Rizvi 2000: 146]。

13) Melville はチェラーグ・ハーンがサフィー廟の管財人であったとするが, 息子である彼が管財人である父に君主より下賜された布を届ける記述で, 史料の誤読である [Melville 2020: 132; Afzal: 964]。

### 2.2.4 サイド、ウラマー

アルジョマンドはコムとアルダビールの管財人を彼の言うところの「聖職者名士 (clerical notables)」, すなわち、もともとスンナ派であったがサファヴィー朝成立後にシーア派に改宗して、法官や宗教関係の官職に就いた名士たちが占めたとする [Arjomand 1984: 124]。表1が示すように、実際はアルジョマンドの定義にあうサイドやウラマーは極めて少ない。典型的な例としては、ミール・アブルヴァリー (26) (29) とその息子イスマーイール (31) が挙げられる。彼の家系はシーラーズのサイドの名家で963-4年にメッカから移住してきた人物の子孫で、大規模なワクフの管財人となっていた [Fārs-nāma: 948-50]。最初はレザー廟の管財人、そのあとガーザーン・ハーンのワクフの管財人を務めたのち、タフマースブ時代の末にサファイー廟の管財人となり、ムハンマド・フダーバンダからも再度任命された [Khulāsat: 664; Ālam-ārā: 148]。その後、軍のシャイフ・アルイスラーム、軍のカーディーと地位を上げ、アッバース時代は20年に亘って宗務部門の長であるサドル職を務めた [Khulāsat: 997-98; Ālam-ārā: 1089]。

しかし、それ以外にサファヴィー家出身者を除いて、サイドやウラマーであった可能性があるのは、ミール・イブラーヒーム (18)、アミール・アシュラフ (19)、マウラーナー・ムハンマドアービド (45) くらいである。他の廟の管財人のほとんどがサイドやウラマーであることを考えれば、大きな特徴である。

以上のようにサファイー廟の管財人には他の聖廟とは異なる特徴があることがわかっ

た。サファヴィー家/シャイハーヴァンド家、ターリシュヤカラーマーンルー、キジルバシュの管財人が見られる一方、ウラマーやサイドの出身者の数は少なかった。ただし、廟のワクフの制度面では、もう一つの重要な点、旧部門と新部門について検討する必要がある。

### 3. ワクフ財の旧部門と新部門

第1章で見たサファイー廟の旧部門と新部門の起源はどこにあるのであろうか。フラグナーはコムを例を引きつつ、いつアルダビールについて部門が分かれたのか不明であるとする [Fragner 1975a: 214]。管見の限り、最も古い史料の記述はファズリーが、1596年、シャー・アッバースの父ムハンマド・フダーバンダの埋葬について述べた部分である。このとき、先帝の遺体を運んだアッバースアリー・スルターン・シャームルー (36) に対して、アルダビールにある偉大なる帝王達の墓廟と新しいワクフ財 (mawqūfāt-i jadīdī) の管理権を与えたという [Afzal III: 209]。別の箇所でもファズリーはこのことを「シャイフ・サファイー廟の新部門の管理権 (tawliyat-i jadīdī-i Āstāna-i Shaykh Ṣafī) をアッバースアリー・スルターンに委ねたこと」と言い換えている [Afzal III: 14]。それ以前にシャー・アッバースがアルダビールを訪問した際の記述でも、ズー・アルフィカール・ハーン (34) やミールザー・イスマーイール (31) との面会は記録されているものの、新部門の管財人については全く言及がない [Afzal III: 107, 125, 208]。これが初めて新部門の管財人をおいた事例と考えてよいだろう<sup>14)</sup>。

それでは、彼が管理していたワクフ財はど

14) Melvilleはこの事例を引いているが、その意味を十分に理解していない。また、'Abbās 'Alī Sultānをシャイフ・サファイーの父の廟があるアルダビール近郊 Kalkhurānの管財人であったとするが、史料は単に造営事業を担当しただけのように読める [Melville 2020: 116, 132, 134 n.39; Afzal III: 393]。Kalkhurān村自体は廟の不動産目録に載っているので、サファイー廟とは別の管財人がいたとは考えにくい [Abdi I: 63a-65a]。

のようなものであったのであろうか。史料に明示されているのは、アラス川の北にあるバイラカン Baylaqān の事例である。シャー・アッパースの命により、幅 50 ザルウ (≒50 m)、深さ 2 ザルウ (≒2 m)、長さ 4 ファルサング (≒24 km) の水路がアラス川からバイラカンまで引かれた。工事にはカラバグ地方の部族民が動員された。完成後はこの水を利用して 100 畝の水田と 1000 の桑園が作られ、住民が集められたという。1605 年、シールヴァーン遠征ののちに、この地に立ち寄ったアッパースは、住民への税を免除し、収益の 3 分の 1 を農民に与え、3 分の 2 を自らのものとして取った。そして、バイラカンが復興したのちに、その (自らの分の) 収益をサフィー廟のワクフとし、新部門の管財人であるアッパースアリー・スルターンに委ね、毎日 120 マン (≒360 kg) の米を炊いて、貧者や善人に与えるよう定めた [Afzal III: 433]。この経緯を見る限り、新部門とはアッパースによって設定される新たなワクフであると考えられる。

アッパースによるワクフの詳細な記述は、ファズリーの未年 /1607-8 年の項にある [Afzal III: 468-71]。驚くべきことに、ファズリーはチャハールダフ・マアスーム (預言者ムハンマド、その娘ファーティマと 12 イマームの 14 名を指す) に対するワクフと一体のものとして説明している。アッパースのチャハールダフ・マアスームのワクフについてはすでにマクチェスニーの研究があり [McChesney 1981: 170-78], 1013/1604-5 年の日付を持つワクフ設定文書のテキストも公刊されている [Qisas: 188-92; Sutūda 2005] が<sup>15)</sup>、主にシーア派信徒でフサインやファーティマの子孫であるサイイド達のため

のものである。このワクフ証書のなかでアルダビールについては、金の器や首飾り、大小の絨毯をサフィー廟に寄進したのみが書かれている [Qisas: 194]。他の史料でも、さまざまな陶器をサフィー廟に寄贈した記録 [Abbāsī: 563-64] やペルシア語の図書をこの廟に寄贈した記述 [Ālam-ārā: 761] などがある。しかし、サフィー廟に対してシャー・アッパースが本格的にワクフを設定した記録は知られていなかったのである。

ファズリーの記録によればワクフ財は、アゼルバイジャンのワクフ財とバイラカンおよびハーニ・アーリヒー Khān-i Ārikhī からの収入であった [Afzal III: 469; Melville 2020: 125]。このハーニ・アーリヒーもカラバグ地方、バイラカン付近にあった [Afzal III: 661]<sup>16)</sup>。同時に設定されたチャハールダフ・マアスームのワクフ財が、イスファハーンやカーシャーンなどイラン高原中央部に分布していることを考えれば、ワクフ財とその対象を地方ごとに分けたと見ることができる。

ワクフ収入の用途としては、前述の毎日 120 マンの米の食事の貧者への提供のほか、旧部門の予算に入っていない 1200 名の廟関係者への服飾費と食費の提供、男女 40 人ずつの孤児のための教師、孤児一人あたり一日 20 ディーナールの文房具・書籍代、毎年、3 着の衣服の提供、教室への毎日 12 マンの米の食事提供、毎週金曜日の孤児の入浴、散髪、衣服の洗濯、教師への現金、穀物、食事の提供が挙げられている。孤児達が成人すると、能力があればサフィー廟の諸部門で働いて、俸給を得ることになり、本人が望まなければ解放された。母親がいる子供には通いで通学することも認められ、孤児の女性が結婚する場合には 3 トマーンの支度金が新郎に

15) 後者は前半だけで終わっているが、前者で欠落している語が含まれている。McChesney は *Qisas* のテキストを Sepantā が翻刻したものを引用しているが、このテキストの質は低い。チャハールダフ・マアスームのワクフの管理については近藤 2007: 15-16 も参照。

16) Melville は『アッパース史』を引用しつつ、ハーニ・アーリヒーをバイラカンの別名とするが、史料の記述はそうは読めない [Melville 2020: 135 n.51; Abbāsī: 494]。

与えられることになっていた。さらに、修道場 (tawḥid-khāna) に対して、毎日 30 マンの米、20 マンの小麦が肉とともに提供され、50 マンの葡萄シロップ、50 マンの砂糖菓子用の油、100 マンのパン用の粉とともに、スーフィー達に供された [Afzal III: 469–70]。

これがアッパースによるワクフの概要であるが、メルヴィルが指摘するように、バイラカンの復興そのものがティムールの過去の事業の再現であるという側面があり [Melville 2020: 117–18]、ファズリーの記述でも「ティムールのワクフ財」<sup>17)</sup>とアッパースのそれとを一体のものとして捉えているようである [Afzal III: 470]。これがまさに新部門のワクフと考えられる。さらに、上述のワクフの記述で旧部門のワクフを補うかたちで、新部門のワクフが設定されている部分もあることがわかる。

なお、現状では、直接的にこの新部門のワクフ財の全容を知る手段はない。サフィー廟の二つの不動産目録も、廟に残され伝世している証書類も基本的に旧部門のワクフに関するものだからである<sup>18)</sup>。中央管理であったチャハールダフ・マアスムのワクフに準ずるものと考えれば、さまざまな文書類も中央で管理されていた可能性が高い。

アッパースは、アッパースアリー・スルターンのあと、1624年にクルバーンアリー・ベグ (38) を管財人に任命した。しかし、アッパースのアルダビール訪問の記事を見るかぎり、彼らが『王侯の慣わし』の述べるような旧部門の管財人に優越する立場にあったとは言えない [Afzal III: 572, 664, 922–23]。また、サフィー期以降は、新部門の管財人の情報が少ないが、たとえば、元コルチバシであった

ムルタザークリー・ハーン (43) 以上に権力のあった新部門の管財人がいたとは考えにくい。『王侯の慣わし』の示すような新部門管財人の優越的な地位は、かなり後の時代のことを示しているのであろう。

なお、これとは別に、イスマーイール、タフマースブラ君主や皇子たちの墓廟はサフィー廟構内にあったが、別のワクフが設定されており、アッパース時代にはスルターンハリール・ミールザーが管財人を務めていた [Afzal III: 470, 518]。別の史料にも、これよりあとの時期と考えられるが、イスマーイールの墓廟の管財人として、ハーン・ザマーン・ミールザーなる人物の名前があがっている [Silsilat: 133]。いずれもサファヴィー一家の出身であった。アッパース時代において、サフィー廟に関しては不動産のワクフ財を管理する3名の管財人がおり<sup>19)</sup>、アブディー・ベグとスィハファーニーによる廟の不動産目録は、そのうちの一人、旧部門の管理人が管理するものだけに関係していたのである。

#### 4. 管財人の職務

ここまで、サフィー廟の管財人について、制度や就任者について述べてきたが、実際に管財人はどのような職務を果たしていたのだろうか。それを多少ともうかがわせる記述が、1009/1600年のシャイフ・アブダール (35) に対する任命状にあるので紹介しよう。

・聖廟にすべての取引は彼の意見によって行われなければならない。彼に知らせずに取引を行ってはならない。

・すべての支払割付書 (barāt) や条件書 (sharṭ-nāma) は彼の印があるかぎり有効

17) この Mawqūfāt-i Tīmūrī が何を指すのかは議論の余地がある。少なくとも同時代の記録にはティムールがバイラカンをワクフとしたという記述はない [Zafarnāma: 1218–20, 1225–27]。

18) ただし、アブドゥルアズィーズ廟の場合のように、旧部門・新部門の区別がなくなった18世紀以降のワクフ財リストからある程度再現できる可能性は残されている。

19) なお、不動産以外では、ファズリーは、別にワクフとされた図書管財人として、Mirzā ‘Abd al-Mu‘min なる人物の名前も挙げている。彼の一族はティムールの時代から代々ワクフ財の図書を管理してきたという [Afzal III: 460]。

である。年金 (vazāyif) や俸給 (mavājib), 手当 (marsūmāt) の支払いは彼の手形 (ḥavāla) や支払割付書で支払われる。

- ・聖廟の財務官 (mustawfi) は、彼の指示書 (raqam) によって、年金や俸給、手当の支払割付書を発行する。日録 (rūznāmajāt) や手問賃 (ujra) の手形 (tamassukāt) は、彼の印と添書がない限り無効である。

- ・聖廟の管理官達 (mushrif) は、毎日、賽物 (nazr) の日録に彼の印を受ける。

- ・アルダビール知事は決して聖廟の重要事に介入してはならない。聖廟にかかわる臣民の間で争いが起きた場合には、聖廟の管財人と監督人 (nāzir) がウラマーと法官の同席のもと尋問し、解決する。

- ・聖廟の監督人で宴席食事係のアリー・ベグは、管財人の監督のもとに食事の提供を行い、管財人がこれを吟味して、毎日、日録にその印を押し、聖廟の財務官が管財人と監督人の印を受けて、財務上の処理をする。

- ・管財人は聖廟での勤めと秩序維持に全力を尽くし、聖廟の諸費用の管理と収入、取り分、前払いの決定に努めなければならない。

- ・聖廟に関する諸事のための努力と義務への取組を陛下にご覧に入れ、官衙によって作成された聖廟の支出指示書と予算書 (dastūr al-'amal) のすべての項目を遵守し、ワクフ設定者達の指示や条件に反してはならない [Silsilat: 223-24]<sup>20)</sup>。

財務上の手続きには必ず管財人の印が必要であったこと、聖廟内の事件については裁判権も有していたことがわかる。また、食事の提供の監督があえて挙げていることには、このことがこの聖廟の重要な機能の一つであったことを示すのかもしれない。財務上の用語は、国家の財政で用いられているものと同様であ

り、同様の技術が用いられていたと考えられる。

一方、『サファヴィー家系譜集』はシャイフ・アブダールの18の事績を挙げている。そのうち最初の5が聖廟そのものの建物の修理や建設、次の4つが店舗や小庭園、商館などワクフ財となるアルダビール市内の建物の建設、残りの9がワクフ財である農地や村落の改修や改良である。どのような事績が優れた管財人のそれとなるのかをも示していると言えるだろう。

### おわりに

本稿が明らかにしたのは、サフィー廟の財務管理の中核を担った管財人をめぐる制度と実際の就任者の性格であった。管財人は、時期によって、知事やダールーガなどの行政官との兼任があり、あるいは代理が実務にあたるなど、必ずしも一貫したものではなかった。管財人には、サファヴィー家／シャイハーヴァンド家の出身者、ターリシュやカラマーンルー、キジルバシュなど、古くからサファヴィー家にゆかりのある人物が任命された一方、他の聖廟で主流である一般のサイドやウラマーは、ほとんど見る事ができなかった。サファヴィー朝下で同様に重要であったシーア派系の聖廟、すなわちレザー廟やマアスーム廟、アブドゥルアズィーム廟は、基本的にサイドやウラマーに管理されていたのであり、その様相は大きく異なっている。

ワクフの新部門と旧部門の起源や実態についても、新たな知見が得られた。新部門はシャー・アッパースによって設定されたものを起源としており、チャハールダフ・マアスームのワクフと同時に行われたものであった。チャハールダフ・マアスームのワクフがイラン高原中央部のワクフ財に基づいていた

20) この部分は、Luṭfiにも参照されているが、ごく簡単にまとめている [Luṭfi 2016-7: 137]。

のに対し、サフィー廟に対する新たなワクフはアゼルバイジャンやその周辺のワクフ財に基づいていた。新部門のワクフ財は、チャハールダフ・マアスームのワクフ同様、中央で管理されたと考えられる。このため、サフィー廟に残る文書群にも廟の不動産目録にもこの新部門のワクフ財についての記述はあまり残っていないのである。廟の不動産目録はあくまで旧部門のワクフ財にかかわるものであり、サフィー廟のワクフすべてにかかわるものではないことに注意する必要がある。

サフィー廟と他の聖廟との相違は、巨視的に見るならば、サファヴィー朝の母体となった神秘主義とサファヴィー朝が政策的に導入した12イマーム・シーア派のそれぞれの拠点の相違とみることもできるだろう。1635年時点で、依然1500名のスーフィーがいたアゼルバイジャン周辺とイラン高原中央部とは信仰のあり方も異なったと考えられる。アッパースが同時に設定した二つのワクフはそれぞれの信仰に合わせて行われたのであり、いわばサファヴィー朝の二つの顔を象徴する事業であったと言えるだろう。

### 参考文献

#### ●史料●

- 'Abbāsī: Mullā Jalāl al-Dīn Munajjim. *Tārikh-i 'Abbāsī: Rūznāma-'i Mullā Jalāl*. Ed. Maqṣūd 'Alī Ṣādiqī. Tehran: Nigāristān-i Andīsha. 1398Kh.
- 'Abdī I: 'Abdī Beg Shīrāzī. *Ṣarīḥ al-Milk*. MS. Mūza-'i Milli-i Irān no.3718.
- 'Abdī II: 'Abdī Beg Shīrāzī. *Ṣarīḥ al-Milk*. MS. Mūza-'i Milli-i Irān no.3719.
- 'Abdī III: 'Abdī Beg Shīrāzī. *Ṣarīḥ al-Milk*. MS. Kitābkhāna va Asnād-i Milli no.2734.
- Afzal II*: Faḏlī Khūzānī Iṣfahānī. *Afzal al-Tavārikh*. Ed. Iḥsān Ishrāqī and Quḍrat Allāh Pīshnamāzzāda. Tehran: Mīrāth-i Maktūb. 1398Kh.
- Afzal III*: Faḏlī Khūzānī Iṣfahānī. *Afzal al-Tavārikh*. Ed. Kioumars Ghereghlou. Cambridge: Gibb Memorial Trust. 2015.
- Aḥsan*: Ḥasan Beg Rūmlū. *Aḥsan al-Tavārikh*. Ed. 'Abd al-Ḥusayn Navā'ī. Tehran: Bābak.

1979.

- 'Ālam-ārā: Iskandar Beg Munshī. *Tārikh-i 'Ālam-ārā-yi 'Abbāsī*. Ed. Īraj Afshār. Tehran: Amīr-i Kabīr. 1334Kh.
- 'Ālam-ārā-yi Ṣafavī: Yad-allāh Shukrī ed. *'Ālam-ārā-yi Ṣafavī*. Tehran: Bunyād-i Farhang-i Irān. 1350Kh.
- Alqāb*: Yūsuf Raḥīmlū ed. *Alqāb va Mavājib-i Dawra-'i Salātīn-i Ṣafavīya*. Mashhad: Dānishgāh-i Firdawsī. 1993.
- Aminī*: Faḏl Allāh b. Rūzbihān. *Tārikh-i 'Ālam-ārā-yi Aminī*. Ed. Muḥammad Amīn 'Ashīq. Tehran: Mīrāth-i Maktūb. 1382Kh.
- Dastūr*: Mīrzā Moḥammad Rafī 'Anṣārī. *Dastūr al-Molūk*. Ed. N. Kondo. Fuchu, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. 2018.
- Ev-oghli*: Ḥaydar b. Abū al-Qāsim Ev-oghli. *Majma' al-Inshā'*. MS Kitābkhāna va Asnād-i Milli no.1071.
- Fārs-nāma*: Ḥājī Mīrzā Ḥasan Fasā'ī. *Fārs-nāma-'i Nāsīrī*. Ed. Maṣṣūr Rastgār-i Fasā'ī. Tehran: Amīr-i Kabīr. 1367Kh.
- Fihrist*: 'Imād al-Dīn Shaykh al-Ḥukamāyī. *Fihrist-i Asnād-i Buq'a-'i Shaykh Ṣafī al-Dīn Ardabilī*. Tehran: Kitābkhāna-'i Majlis. 1388Kh.
- Ḥabīb*: Khānda-mir. *Ḥabīb al-Siyar*. Vol.4. Ed. Jalāl al-Dīn Humā'ī. Tehran: Khayyām. 1380Kh.
- Ḥayātī*: Qāsim Beg Ḥayātī Tabrizī. *Tārikh-i Ḥayātī*. Ed. Kioumars Ghereghlou. New Haven: The American Oriental Society. 2018.
- Jahānārā*: Muḥammad Ṭāhir Vaḥīd Qazvīnī. *Tārikh-i Jahānārā-yi 'Abbāsī*. Ed. Sa'īd Mīr Muḥammad Ṣādiq. Tehran: Pazhūhishgāh-i 'Ulūm-i Insānī va Muṭāla'āt-i Farhangī. 1378Kh.
- Khulāṣat*: Aḥmad Qummī. *Khulāṣat al-Tavārikh*. Ed. Iḥsān Ishrāqī. Tehran: Dānishgāh-i Tīhrān. 1383Kh.
- Khuld I*: Vālih Iṣfahānī. *Khuld-i Barīn*. Ed. Mīr Ḥāshim Muḥaddith. Tehran: Bunyād-i Mawqūfāt-i Afshār. 1372Kh.
- Khuld II*: Vālih Iṣfahānī. *Irān dar Rūzgār-i Shāh Ṣafī va Shāh 'Abbās-i Duvvum*. Ed. Muḥammad Rizā Naṣīrī. Tehran: Anjuman-i Āthār va Mafākhir-i Farhangī. 1380Kh.
- Naṣr-ābādī*: Muḥammad Ṭāhir Naṣr-ābādī. *Taḏkira-'i Naṣr-ābādī*. Ed. Nājī Naṣr-ābādī. Tehran: Asāṭīr. 1378Kh.
- Qīṣaṣ*: Valī Qulī b. Dāvud Qulī Shāmlū. *Qīṣaṣ al-Khāqānī*. Ed. Ḥasan Sādāt-i Nāsīrī. Tehran: Vizārat-i Farhang va Irshād-i Islāmī. 1371Kh.
- Ṣafvat*: 'Abd al-Karīm Muḥammad Ardabilī.

- “Şafvat al-âthâr fi akhbâr al-akhiyâr.” Ed. Mir Hâshim Muḥaddith. *Mirâth-i Islâmî-i Irân* (R. Ja' fariyân ed.), vol.3, 197–235, Qum: Kitâbkhâna-'i Mar' ashî, 1374Kh.
- Shâh Şafi*: Abû al-Mafâkhir Tafrishi. *Târikh-i Shâh Şafi*. Ed. Muḥsin Bahrâm-nizhâd. Tehran: Mirâth-i Maktûb. 1388Kh.
- Silsilat*: Shaykh Ḥusayn Pirzâda Abdâl Zâhidî. *Silsilat al-Nasab-i Safaviyya*. Ed. Ḥusayn Naşîr-bâghbân. Tehran: Aramghân-i Târikh. 1395Kh.
- Şipâhânî*: Muḥammad Tâhir Şipâhânî. *Şarih al-Milk*. MS. Mûza-'i Milli-i Irân no.4324.
- Ṭahmâsb*: Shâh Ṭahmâsb. *Tazkira-'i Shâh Ṭahmâsb*. Berlin: Kaviyânî.1924.
- Tazkirat*: (Mirzâ Shafi'â). *Tazkirat al-Mulûk*. Ed. Muḥammad Dabîr-i Siyâqî. Tehran: Amir-i Kabîr. 1368Kh.
- Ẓafarnâma*: Sharaf al-Dîn 'Alî Yazdî. *Ẓafarnâma*. Ed. Sayyid Sa' id Mir Muḥammad Şâdiq and 'Abd al-Ḥusayn Navâyî. Tehran: Kitâbkhâna-'i Majlis. 1387Kh.
- 研究文献●
- Afshâr, İraj. 1967. “Ujrat-i Kâtib va Şilla-'i Kitâb.” *Râhnâmâ-yi Kitâb* 10: 184–185.
- Aḥmadî, Nuzhat and Maryam Luṭfî,. 2009. “Tawliyat-i buq'a-yi Shaykh Şafi al-Dîn Ardabilî dar dawra-'i ḥukûmat-i Şafaviyân.” *Târikh-i Irân va Islâm* 19(3): 27–46.
- Arjomand, Said Amir. 1984. *The Shadow of God and the Hidden Imam: Religion, Political Order, and Societal Change in Shi'ite Iran from the Beginning to 1890*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Astarian, Garnik, and Habib Borjian. 2005. “Talish and the Talishis (The State of Research).” *Iran & the Caucasus* 9(1): 43–72.
- Aubin, Jean. 1984. “Revolution chiite et conservatism: Les soufis de Lâhejân, 1500–1514.” *Moyen Orient et Océan Indien* 1: 1–40.
- Barati, András. 2020. “An Early Decree of Nâdir Shâh Concerning the Waqf of Ardabil.” *Iranian Studies* 53: 963–979.
- Bhalloo, Zahir, and Omid Rezai. 2019. “Inscribing Authority: Scribal and Archival Practices of a Safavid Decree.” *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 62(5–6): 824–55.
- Dânishpazhûh, Muḥammad Taqî. 1966. “Asnâd-i Darvish Tâj al-Dîn Hasan Valî dar Niyâk-i Larîjân.” *Nuskhahâ-yi Khaṭṭî* 4: 481–648.
- Dânishpazhûh, Muḥammad Taqî. 1967. “Āstâna-hâ-yi Mâzandarân.” *Ma'ârif-i Islâmî* 2: 56–65.
- Fragner, Bert. 1975a. “Das Ardabiler Heiligum in den Urkunden.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 67: 169–215.
- Fragner, Bert. 1975b. “Ardabil Zwischen Sultan Und Schah. Zehn Urkunden Schah Tahmasps II.” *Turcica* 6: 177–225.
- Floor, Willem. 2000. “The Şadr or Head of the Safavid Religious Administration, Judiciary and Endowments and Other Members of the Religious Institution.” *Zeitschrift Der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 150: 461–500.
- Ghereghlou, Kioumars. 2018. “Editors Preface.” *A Chronicle of the Early Safavid and the Reign of Shah Ismâ'il* (K. Ghereghlou, ed.), vii–xxx, New Heaven: American Oriental Society.
- Hidâyati, Muḥammad 'Alî. 1344Kh/1965–6. *Āstâna-'i Ray: Majmû'a-'i asnâd va farâmin*. Tehran: Shirkat-i saḥâmi-i afsat.
- Kondo, Nobuaki. 2015. “The Shah 'Abd al-'Azim Shrine and its Waqf under the Safavids.” *Mapping Safavid Iran* (N. Kondo ed.), 41–65, Fuchu, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Luṭfî, Maryam. 1395Kh/2016–7. *Buq'a-'i Shaykh Şafi al-Dîn Ardabilî dar dawra-'i Şafaviyân*. Tehran. Manshûr-i Samîr.
- Martin, B. G. 1965. “Seven Safavid Documents from Azarbaijan.” In *Documents from Islamic Chanceries*, First Series, edited by S. M. Stern, 171–207. Oxford: Bruno Cassirer.
- McChesney, R. D. 1981. “Waqf and Public Policy: The Waqfs of Shah 'Abbas, 1011–1023/1602–1614.” *Asian and African Studies* 15: 165–90.
- Melville, Charles. 2020. “Shah 'Abbas's Patronage of the Dynastic Shrine at Ardabil.” *Muqarnas* 37: 111–38.
- Mudarrisî Ṭabâṭabâyî. 1976. *Turbat-i Pâkân: Âthâr va binâhâ-yi qadîm-i maḥdûda-'i kunûni-i dâr al-mu'minin-i Qum*. 2 vols. Qum: Mihr.
- Reid, James. 1984. *Tribalism and society in Islamic Iran 1500–1629*. Malibu, CA: Undena Publication.
- Rizvi, Kishwar. 2000. “Transformations in Early Safavid Architecture: The Shrine of Shaykh Safi al-din Ishaq Ardabili in Iran (1501–1629).” PhD. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Rizvi, Kishwar. 2011. *The Safavid Dynastic Shrine: Architecture, Religion and Power in Early Modern Iran*. London: I.B. Tauris.
- Röhrborn, Klaus-Michael. 1966. *Provinzen und Zentralgewalt Persiens im 16. und 17. Jahrhundert*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Şafari, Bâbâ. 1370Kh/1991–2. *Ardabil dar*

- Guzargāh-i Tārīkh*. 3vols. Ardabil: Dānishgāh-i Āzād.
- Savory, R. M. 1960. "The Principal Offices of the Safawid State During the Reign of Isma'il I (907-30/1501-24)." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 23(1): 91-105.
- Sawhāniyān-i Ḥaḳīqī, Muḥammad and Rizā Naqdī. 1397Kh/2019-20. *Āstān-i Quds-i Razavī; Mutavalliyān va Nāyib al-Tawliya-hā*. Mashhad: Āstān-i Quds-i Razavī.
- Sutūda, Manūchīhr. 2005. "Vaḳf-nāma-'i Shāh 'Abbās." *Vaqf: Mirāth-i Jāvidān* 47/48: 10-13.
- Woods, John E. 1999. *The Aqqyunlu: Clan, Confederation, Empire*. Revised and Expanded Edition. Salt Lake City: The University of Utah Press.
- 近藤信彰 2007 「ワクフと私的所有権——チャハールダフ・マアスームのワクフをめぐる」『アジア経済』48(6): 9-28.
- 長谷部暢子 1990 「シャー・アッパース一世のギーラーン地方政策 (1)」『史学』59(4): 29-58.
- 羽田正 1978 「サファヴィー朝の成立」『東洋史研究』37(2): 24-56.
- 羽田正 1987 「シャー・タフマースプのキジルバシュ政策」『オリエント』30(2): 28-46.